

次世代有機ELを開発 安達 千波矢さん

2

科学する人

有機EL開発に取り
組む安達千波矢さんは
「これはありそうだ。こがいはありそうだ。こ
い」と願った。

組む安達千波矢さんは「これはありそうだ。九州大
高校時代、一数式は美
しい」と物理に魅せら
れ、中央大物理学科に
進んだ。だが大学3年
の時に、外部の研究者
の講義を聴き、光を出
す有機物に出会う。
難しそうだ、やり
国

博士号取得後、リコ
1で勤務。1991年、
40度の高熱を押して米
取ったデータでも、す
んなりとは通らない。

物理から方向転換



大学院時代の安達千波矢さん(右端)
1988年(九州大提供)

米国で研究、試練の日々

けんかのような議論の
繰り返し。論文の草稿
を渡すと翌日、追加デ
ータを要求する赤ペン
のチェックが大量に付
いて戻ってきた。「そ
ういう状態でも楽しむ
人しか残れなかった」
フォレスト氏はその
ころ、発光効率が高
い第2世代の有機EL
を開発した。安達さん
も関わったが、ペンチ
ヤーを立ち上げて実用
化させる過程を目の当
たりにし、米国の底力
を感じた。

オレストという研究者
と出会った。誘われて
訪れた大学は日本とは
違い、充実した設備が
あった。衝撃を受け「い
つか米国で研究した
ら」と願った。

99年、念願がかなう。
フォレスト氏は、当時
プリンストン大の教授。
3年間、教授の下
で研究した。

想像を絶する厳しさ
だった。1週間徹夜で
取ったデータでも、す
んなりとは通らない。